

丸の内のまちづくり (summary)

— 130年の歴史を引き継ぐ現在・過去・未来 —

東京「丸の内」は1891年に岩崎彌之が当時練兵場であった10万7千坪の土地を明治政府より払い下げを受け、以来日本のビジネスの中心地とすべく開発が進められてきました。二度の大戦を経験し時代の要請に応じてその姿を変えビジネスセンターとしての機能を更新し、さらに人々が安全快適に行き交うアメニティーの高い街へと変貌して現在に至ります。

この歴史を通して引き継がれたまちづくりの基本的な考え方は、1923年に竣工した旧「丸の内ビル」のビル内自由通路に始まります。東西、南北方向に配された通路に沿って店舗が並び人々が自由に往来する様子は現在の丸の内に通じる姿といえます。2002年に現在の「丸ビル」が竣工し、この考え方は大手町から丸の内、有楽町地区まで広く展開され、世界でも類例の無い高度なビジネス機能と高いアメニティーを備えたエリアとして現在も変化し成長を続けています。

「まちづくりガイドライン」は現在の丸の内のまちづくりの規範となるもので、皇居に面する景観の在り方や地下と地上の連続した歩行者ネットワークの在り方などが示され、丸の内を理解するうえで重要な文書の一つです。また変化を支える都市計画の様々な制度も欠かせません。東京駅舎の復元が実現したのもこの都市計画の制度によるところが大きく、こうした法的制度の背景があることも公民連携でまちづくりを進める丸の内の大いなる特徴といえます。

丸の内には帝国劇場や出光美術館、また近年は東京国際フォーラムや三菱一号館美術館などが開館し、「仲通り」の彫刻展示やイベントなどと共に美術や音楽にも親しめる街として変化してきました。また何よりもまちづくりに関わる建築設計者たちの想いが街のデザインにちりばめられ、丸の内の魅力を大いに高めていることも忘れてはいけません。これらの一部も紹介します。

前 (株)三菱地所設計代表取締役社長
大内 政男